

[當評論『アメリカの自然と生活』も、向後評論『醒めて踊れ』の以下文を援用し、その文中「近代化」を「文明化」と読み直すことで、理解出来る。そして肝腎なのはこの文章こそが、日本の現状(米國化・文明化D1適應異常即ち右圖)からの脱出方法なのであると言ふ事](PP圖『ソフトウェア』参照)
 *「近代化(⇒文明化:D1)の必要條件は技術や社會制度など、所謂『ハードウェア』のメカナイゼーション(機械化F)、システムライゼーション(組織化F)、コンフォーマライゼーション(劃一化F)、ラショナライゼーション(合理化F)等々の所謂近代化に對處する精神の政治學の確立(Eの至大化)、即ち所謂『ソフトウェア』の適應能力(Eの至大化)にある。(中略)それに對應する方法は言葉や概念に囚れず、逆にこれを利用すること、即ち言葉の用法(Eの至大化=言葉の自己所有化)にすべてが懸つてゐる。自分と言葉との距離が測定(Eの至大化)出來ぬ人間は近代人ではない。いや人間ではない」(全七P393)。

P466下:「ヨーロッパ(△枠)の十八世紀は理性、合理性、合目的性、進歩などの概念が信じられてゐた時代」⇒「十九世紀にいたつて一頓挫をきたした」⇒「科學(F)だの進歩(F)だのといつたところで、大したことない」⇒「物質文明(D1)が人間の幸福に寄與しうるものにはおのづから限界のあることに氣づいた」⇒「この絶望の裏には科學(F)の行き詰まりと同時に、資本主義(F)の行き詰まり(Eの至小化)があつた」。

歴史的
変遷

P467上:「アメリカ(△枠)はそれ(科學の行き詰まり・資本主義の行き詰まり)に觸れずにすることができた」⇒「なぜなら、アメリカ人の前には、科學技術(F)を適用し資本主義(F)を延長せしめる無限の空間(捨てられる自然)があつた」。

歴史的
変遷

* P467上:「自然科學(F)と物質文明(D1)にたいする私たち(△枠)の期待は底なし(距離感喪失・沈湎)である」⇒「突如としてアメリカ文明(D1)が流れ込んできたのだ。機械(F)が次々に送りこまれてきたのだ。十八世紀も十九世紀もあつたものではない。物質文明(D1)は私たちにとって、たんに同一線を辿る(歴史の繼續性PP圖參照)先進國の贈物ではなく、まつたく別世界の異質のものだつたのである」⇒「その結果、どういふことが起つたか」⇒「日本人の眼に、機械文明(D1)はあらゆる富(F)を生みだす鍊金術(絶対視=Eの缺如)として映じたのである[即ち「鍊金術」視とは、機械化(F)に対する距離感喪失(Eの至小化或いは缺如)=近代(c')に対する距離感喪失(近代化&文明D1化適應異常・D1の至小化)を是は意味する]」。

